

闇の中に輝く光⑤ 「響きとして生きる」ヨハネ 1:22-37

わたしたちは前回からバプテスマのヨハネの物語を分かち合っています。ヨハネはヨルダン川で人々にバプテスマを受け、人々を教えていました。ある日、彼のところにエルサレムからユダヤ人たちがやってきて聞きました。「あなたはだれですか」4回に続く質問の中でヨハネはイザヤの預言を通して答えました。「わたしは荒野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」(1:23)ヨハネは自分自身が人々を救うために来たメシアではなく、主の言葉を語るために来た預言者でもなく、メシアが来られるの知らせる山びこのような響きだと告白したのです。イエス・キリストを証しする者として立てられたということです。今日は最初の証人であったヨハネが響きとして生きた歩みに注目し、そこからわたしたちへのメッセージを受けたいと思います。

バプテスマの場で

ヨハネは、バプテスマのヨハネ、洗礼者ヨハネと呼ばれています。イエスさまの弟子である使徒ヨハネと区別するために付けられたあだ名だと思いますが、そこにバプテスマがついていることは、ヨルダン川で人々にバプテスマを受けることが彼の中心的な働きであり、そのことで有名になり、エルサレムからユダヤ人たちが訪ねてきたと考えられます。ヨハネのバプテスマは今教会でイエスさまへの信仰を告白し、教会の一員となるために行われているバプテスマとは少し違う性格を持つものでした。流れる水で自分の罪を流し、赦しを受けるための儀式だったのです。では、ヨハネはどうして人々にバプテスマを受ける働きをしたのでしょうか。

ルカによる福音書 1章によると、ヨハネは「イスラエルの人々の前に現れるまで荒野に」(ルカ 1:80)いました。そして、主の言葉がヨハネに降ったとき、ヨルダン川でバプテスマを受ける働きを始めました(ルカ 3:3-4)。ですから、この働きは主から示されて始めたものに違いありません。ところが、今日の聖書の箇所を通してその働きの様子をみますと、不思議な姿が見えてきます。

エルサレムから来たユダヤ人たちはヨハネに言います。「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を受けるのですか。」(25節)すると、ヨハネは答えました。「わたしは水で洗礼を受けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」(26-27節)なぜバプテスマを受けるかと聞かれたら、その理由を答えるべきですが、ヨハネはその理由ではなく、自分の後に来られる方を紹介しているのです。翌日、ヨハネは自分のところに來られたイエスさまを皆の前で紹介しました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(29節)、「聖霊によって洗礼を受ける人である」(33節)、「この方こそ神の子である」(34節)長く荒野で待って、やっと主に示され、始めた働きでしたが、ヨハネの姿をみますと、彼はたった一つのことに集中しているように見えます。イエスさまを紹介することです。そのチャンスを得るために、その場を作るために、一生懸命働いていたように。31節にヨハネはそのような思いを明らかにしています。「この方がイスラエルに現れるために、わたしは水で洗礼を受けに来た。」

弟子たちを教える場で

ヨハネのもう一つの働きは自分に従う弟子たちを教えることでした。聖書にはヨハネが弟子たちを教える場面はありませんが、35節のようにヨハネに弟子たちがいたことからそう考えられます。実は、当時の弟子という言葉は学費を払って正式に先生に習っている人を意味する言葉でした。弟子たちは先生の言動と服装まで真似をしながら従っていたそうです。ヨハネは自分の弟子たちといたとき、イエスさまが歩いておられるのを見つけてこう言いました。「見よ、神の小羊だ」(36節)「見なさい。昨日わたしが人々の前で紹介した方がおられる。あの方はすべての人の罪を背負い、乗り除いてくださる神の子なのだ。」自分が教えている弟子たちにもイエスさまを紹介したのです。すると、予想外のことが起きました。その弟子たちがヨハネをおいてイエスさまに従ったのです。(37節)。ヨハネは自分をおいてイエスさまに従う弟子たちを見ながら何を思ったでしょうか。ショックを受けたでしょうか。ヨハネは喜んでいたと思います。それがヨハネの願っていた働きだからです。「わたしは喜びで満たされている。あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」(ヨハネ 3:29-30)これが響きとして生きたヨハネの歩みでした。

わたしの仕事の場で

日々皆さんにはどのような仕事を与えられていますか。職場、家庭、地域、あるいは教会で。子どもたちや学生たちには勉強を仕事と思っても良いでしょう。なぜわたしたちは日々仕事をしているのでしょうか。天地創造の前から今までずっと働いておられる神さまはわたしたち一人一人に仕事を与えてくださいます。神さまが与えてくださったものだから、お金を稼ぐため、生きていくための手段だけでなく、わたしたちの人生において大事な意味が込められているはずです。神さまが世界を造られた時、アダムとエバにエデンの園を耕し、守る仕事を与えてくださった(創 2:15)ことから分かるように、仕事は神さまがわたしたちを祝福してくださるためのものなのです。では、具体的に仕事にある意味、祝福は何でしょうか。

①まず、わたしたちは仕事から喜びを得ることができます。汗をかくことの喜び、自分の仕事でだれかの力になれる喜び、仕事を通して将来の夢を描く喜び、自分の願いを実現させていく喜びなど。「人間にとって最も良いのは、飲み食いし、自分の労苦によって魂を満足させること。しかしそれも、わたしの見たところでは、神の手からいただくもの。」(コヘレト 2:24)②次、どんな仕事であっても主に与えられた自分の仕事を誠実に担うときにわたしは自分を見ながら微笑んでおられる神さまを感じることができます。マルティン・ルターはこのように言いました。「靴を作るキリスト者は靴に小さな十字架を付けることでなく、丈夫で良い靴を作ることでキリスト者としての義務を果たす。なぜなら、神は職人の熟練した技術に目を留められる。」③最後三つ目は、わたしたちが与えられた仕事に献身したら、その仕事は周りの人々にキリストがどんなに魅力的なお方なのかを現す力を持つようになります。「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」(マタイ 5:16)わたしたちが主に与えられた仕事を誠実に担いつつ、主の恵みを伝える器となりますように、ヨハネのように伝えるチャンスを待ちつつ備えることができますように。